新上五島町

深い信仰心を物語る 頭ヶ島天主堂

頭ヶ島の白浜集落にある「頭ヶ島天主堂」は一九一九（大正八）年に建てられた、日本では珍しい石造りの教会堂だ。

江戸時代まで無人島だった頭ヶ島に、迫害から逃れてきた潜伏キリシタンたちが住み着いたのは一八五九（安政六）年のこと。彼らは谷間の狭い土地を切り拓いて、集落を形成した。

一八七三（明治六）年、キリスト教禁止の高札が撤廃されると、信徒たちはカトリックに復帰し、教会の建設に着手した。五島の教会は、どれも信徒たちの血のにじむような努力の末に建てられている。頭ヶ島天主堂の建設でも資金の調達は厳しく、信徒たちは昼間は教会建設の奉仕へ、夜は疲れた体を引きずって漁へ出た。

建造に使われた石は、目の前のロクロ島など周辺から切り出された砂岩だといわれている。教会建設は限られた資金の中で行わなければならないため、それほど高価ではない砂岩が採用されたのだろう。しかも江戸時代末期から大正時代にかけて、頭ヶ島の対岸にある崎浦地区には多くの石工がおり、技術もあった。しかし、いくら材料が豊富にそろい、優秀な石工がいるとはいえ、その労力は想像をはるかに超える。積み上げられた石にはノミで削った跡が見られ、人の手によって石が切り出されたことがよく分かる。大きな石は、積み上げるのに一日がかりだったという。そうして要した年月は実に十年。信徒たちは遂に心安らぐ祈りの場を完成させた。

石造りの天主堂は力強い印象だが、中へ入ると、それは一変する。パステルカラーの花の装飾に象徴される柔らかな雰囲気は、「花の御堂」と呼ばれるのもうなづける。頭ヶ島天主堂の設計者は新上五島町の出身で、教会建築の第一人者として知られる鉄川與助。彼は数々の教会堂を手掛けたが、石造りは頭ヶ島天主堂のみ。信徒たちの切実な想いは、與助の優れた才能とセンスによって見事に実を結んだ。

頭ヶ島天主堂のある集落を含む「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は、長崎と天草地方の潜伏キリシタンが禁教期に密かに信仰を続ける中で育んだ、信仰継続に関する独特の文化的伝統を物語る貴重な文化遺産として、平成三十年の世界遺産登録を目指している。